文部科学省・筑波大学国際教育協力シンポジウム資料

千葉県茂原市立南中学校 美術科教諭　佐 藤 雪 絵

H14年7月～H16年3月 ブルガリア・スタラザゴラ市ロディーナ芸術学校に赴任
5歳～20歳くらいの生徒約100人の学校で10歳～15歳のクラスを受け持つ
日本文化を取り入れた工芸（工作）を担当した。

＊以下 現地に赴き、約半年後の隊員報告書の内容（原文そのままです。）

（1） 受入国での生活

＊生活上の創意工夫＊

日常生活の上で、特に日本と異なる部分は、ほとんどなく取り立てて不便さを感じていないのが実状だが、（というよりも、いろいろなことに、もう慣れてしまったのかもしれない）強いていえば買い物と洗濯、そして物の破損だろうか。

買い物については、大きなスーパーマーケットに行けば、日本のように好きなものをゆっくりと好きなだけ吟味しながら選び、買うことが出来るが、近所の小さな店ではまだ共産時代の名残なのか、カウンターの後ろのものをいちいち指示して取ってもらわなければならず、かなり面倒である。混んでいる時間などは行列になっていたりしてかなり疲労してしまう。土日を利用してなるべく大きなマーケットでまとめて買うようにしている。特に肉類などは、小売店ではまず肉の部位を説明して、グラム単位で切ってもらうという具合なので、これもかなり面倒な作業であり、パックで売られているマーケットで買うのが一番である。またマーケットは荷物を入れる袋を買うというシステムなので、常に折りたためる袋をかばんにいれて出かけている。

次に洗濯であるが、もちろん我が家には洗濯機はなく（ブルガリア全体では大分普及してはいるようだが、）すべて手洗いである。日本にいた時は全自動洗濯機で行っていた作業を、自分でやるということで、改めていろいろなことを発見してその部分では楽しい作業である。着るものへの愛着が増すことも確かである。しかしものすごく時間がかかる。また洗剤によってはかなり強いものもあるようなのですすぎをしっかりやらないと、かぶれたりしてしまうらしい。皮膚の弱い人用の（子供用の）洗剤も売ってはいるが良いかどうかはわからない。下着類は毎日洗って部屋に干しておくが、あとは週に 1,2 回の洗濯で済むように着まわしをしている。それから布団干しは、今のアパートは幸いテラス部分が通常よりもかなり広いのでそこにヒモをつけて、天気の良い日は全部干すことができるが、近所はあまり干しているのを見たことがなく、その辺はどうなのだろうか？といつも思っている。実際はアパートの立地条件が悪いと、1 日のほんのわずかな時間しか日が当たらないという問題もある。健康面と衛生面を考えると、アパートの部屋の向きはとても大事なことである。

最後に、物の破損と修理であるが、こちらにきて感じたことは基本的には自分で直すことが大前提である。こちらのアパートの外観はとても古くかなり傷みも激しいところがほとんどであるが、それとは対照的にアパートの家の中はとてもきれいで驚くことが多い。というのも皆、壁から床からすべて改装しているらしい。こちらのアパートはみな買い取りの家が多いので、その辺は自由らしい。内装は確かに自分でなんとかなるが、技術的な要素が必要とされる場合は自力では無理であり、プロの力を頼るしかない。

さて、こちらのものはとにかく壊れやすい。冷蔵庫、ボイラー、ペチカ(電熱調理機)、水道関係、電気や、水道

や、をこちらで何回呼んだか、もう忘れてしまった。(位呼んでいる)でもすぐにはこない。しばしの辛抱。しかし、みな親切、丁寧で、非常に有り難い。
多分、そもそもの品質もさることながら、老朽化が進行していてすべてが、一昔前のものであるので、なんとかごまかしながら使っているような感じなので、しかたがない。冷蔵庫などは、本当にビックリするくらいうるさい音がするのだが、ロシア製だとこのくらい当たり前と言われてしまった。こちらでは、すべてが電気で動いていて、いったん停電になると何も出来なくなるが、その時は何もしなくて良い日となるべくあっさりと決めて、ゆっくり回復を待つこと(しかない)。あとはーここは日本ではないんだーと改めて感じながら、ブルガリアのシステムの向上について何をどうしたらよいかを少し考えるのも良いと思う。あとは日頃から、常にフレキシブルな対策を考じていれば、その場であせることはないと思う。

＊受入国の人との交際＊

ブルガリア人は、日常生活の中で誕生日やプラズニックを非常に大切にしていて仕事や学校よりも、優先順位は上である。特に学校などは、誕生日なので早退する、欠席するというのはあたりまえのようである。

したがって、おのずとこちらもそれにあわせた付き合いを要求されることもしばしばである。赴任当初は、向こうも気を使ってくれたのか、本当にいろいろなところに呼んでもらい、多くの人と知り合い、街中で逢うと挨拶を交わす人々もかなり出来た。しかし、すべてに行かなくても良い、ということを発見してからは多少楽になり、適宜ここなしている。

基本的には職場での、人間関係を軸にしての広がりなので、まずは仕事をしっかりとやりたいという自分自身の考えを理解してもらえていれば、それによっての障害はないと思う。あとは日常的な会話を適宜に楽しめるようにして、そして何よりも自分が、前向きに明るく過ごせるように工夫すること。あと、ブル語の壁は高くても、心の壁を厚くしないようにというのは大切だと思う。

＊語学の習熟度＊

日常の会話を聴くという部分では大分慣れてきているが、いざ自分がしゃべる場面になると、やはり単語力が乏しい。授業でよく使う単語や言い回しなどはわかっても、子ども達から早口ブル語でまくし立てられて、常にオシテベドヌシュ、モーリャ。ポ、バーブノ(もう一回言ってゆっくりと)であり、そのたびにいろいろなことを教えてもらっているが、その理解も？難しい。週に1回、先生の下で習っているが、やはり使わないと忘れてしまう。職場でも、仕事上の単語は大体わかっても、いざ世間話になると、ほとんどわからないが、なんとなく勘で参加している。でもなんとかなるところは、周りの協力のおかげであろう。

すべてを理解するのは、ムリとしても半分くらいはなんとかできるように、日々の生活の中で工夫し向上できるようにしたい。

＊余暇の過ごし方＊

基本的には赴任先であるシコラはフル営業(月～日)であり、常に誰かが勤務している状態であるので、結構忙しい職場である。(場合によっては土日も行く。)
仕事がないというブルガリアではめずらしい位、仕事はある？。従ってあまり余暇をもてあますことはなく、土日は買い物や、身の回りの事や何かで過ぎてしまっている。あとは、授業の準備や教材の研究や教材探し(マテリアルの研究)が割と大変である。(ブルガリアはやはり良い材料はあまりないので)
余暇といっても、私の場合、趣味と実益が一緒の仕事なので教材研究、そのものが、自分の好きなやりたいこ

となので、常に何かを制作している状態である。

授業サンプルを作っておくことも、実はとても重要なことである。（授業での説明が半分で済むので。）

あとは、長い休暇の時は少し足をのばして、写真をとりに出かけたり、または絵を描いたりしている。あとは、近場の友人達と連絡しあって、たまに会って情報交換している。

（2） 受入国での業務水準

＊担当業務の受入国での状況＊

そもそもは、「チタリシテ」の位置付けが日本のシステムの中ではっきりと、あてはまるものがないので、良く理解できずに不安だったが、実際にこちらにきてみて思ったよりもきちんとされていたのに驚いた。日本の芸術学校という枠の中に入れるくらいのレベルで、しっかりやっている。実際通ってきている生徒の質もかなり高く、4 歳から 18 歳までいるが、やる気のない生徒はほとんどいなく、みな一所懸命に課題に取り組む。教師サイドもみな自分の担当業務をきちんとこなしており、また協力体制もあり、仕事を行う上では、やりやすく、とても良い状況である。

現在のところ絵画、陶芸、グラフィクデザイン、工芸、芸大受験用コースに分かれて活動している。私の担当しているのは、工芸コースである。主に、日本文化を織り交ぜながらの工作を行っている。小学生が中心なので教材も、扱いやすい安全なものを工夫している。

ただし、教室環境や設備面で多少の不自由さがあり、対策を思案中ではある。また良い教材を用意するためには、日頃からインターネットなどでいろいろな情報を集めておくことも必要だと感じている。こちらではそういった種類の本は一般書店にはまず売っていないので。

現在までのところ、折り紙、書道、凧、モビール制作を行っている。